



線にこそ各々の主張が込められているように感じる。

つまり画面に表象されるのではなく、何らかの描かれていない主題が絵画を見続けていくと立ち表れてくるのだ。

それこそ表面的な権威主義の絵画と人間の尊厳と共存を目指す現代美術の差異が明確に示されていく。各作品に込められた想いとは自己を含む人間の存在と、人間を取り囲む自然、地球、宇宙にまで馳せられている。新しいことや奇抜なことをするのが現代美術ではない。

現代美術はいつの間にか「先進

FAVORITE part 2 展には横浜の永野のり子が和紙に岩絵具、水彩、アクリルを4点、兵庫の大森梨紗子が和紙に油彩を7点、NYCの日影眩がキャンバスに油彩、アクリルを7点、韓国の姜善英が紙にアクリル、鉛筆を5点、長崎の井川惺亮は綿布にアクリルを9点、群馬の松本さと子は紙にカーボン紙インクを3点、出展された。

いずれも絵画だが慣例に拘らず、自らの発想に基づいた技法をそれぞれのアーティストが用いていることが理解できる。それら作品は決して奇を衒ったものにはならず、むしろ素材を気にせず画中の空間に眼を投じることが可能となっている。

それでも全ての作品に共通する事項とは、地と図の間にか何が存在するということだ。通常抽象であれ具象であれ、描かれているもの=主題と、背景=副題が明確に分断される。しかしこの展覧会に並ぶ作品群にはそのような二項対立は存在せず、かといって地と図が一体化されているわけでもなく、境界

国」の「ラグジュアリー」と化してしまっただが、その本質とは「未開」と呼ばれる場所であっても「いま、ここ」に、垂直に落下し制作される人間の存在そのものの作品である筈だ。現代美術は落下と共に上昇する。それは大気圏を潜り抜け、時間と空間の概念を吹き飛ばす地点にまで目指している。そのように各地で行われている現代美術がいま、ここに集結した意義は計り知れない。苦難の時代にこそ、現代美術は真の力を発揮していく。

